悔い改めがもたらす恵み　　詩篇 51:1-7

今年のレント(受難節)は２月１４日の「灰の水曜日」から始まりました。今２週目に入っています。レントの最初の日を「灰の水曜日」と呼びますが聖書で「灰」は三つのものを表しています。

1)第一は「悔い改め」です。古代の人々が粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めたことに由来しています。ダニエルは、イスラエルの人々のためにとりなしたとき、「顔を神である主に向けて断食をし、粗布をまとって灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた」 ダニエル 9:3 とあります。ユダヤの人々にとって灰と悔い改めとは切っても切れない関係にありました。イエスの宣教の第一声は「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」マルコ 1:15 でした。イエスは神の国の到来を告げ、その神の国に入る道を教えました。その道とは「悔い改めて…信じなさい」と言われているように「悔い改め」と「信仰」です。信仰だけではありません。それは神の国には「悔い改め」という門をくぐらなければ入ることができないからです。

しかし、「悔い改め」とは何なのでしょうか。弟子たちが「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか」とたずねた時、イエスは、こどもを弟子たちの目の前に立たせ、こう言いました。「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。」マタイ 18:3 この「向きを変えて」と訳されているところは、以前は意味を汲み取って「悔い改めて」と訳されていました。悔い改めとは、神に背を向けて神から去っていた者が、「向きを変えて」神に立ち返ることなのです。

しかも、いったん「向きを変えた」なら、そのまま、まっすぐ神に向かうことが大切です。悔い改めは最初にイエス・キリストを信じたときだけで終わるものではありません。神に向かい、神に近づくことは、信仰者に与えられた特権なのです。ですから悔い改めて、神に近づくこと以上に大きな祝福はないのです。

マルチン・ルターは『九十五か条の論題』の最初にこう書きました。「私たちの主であり師であるイエス・キリストが、『悔い改めよ……』と言われたとき、彼は信ずる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである。」ほんとうの悔い改めは、一度だけのものではありません。悔い改めは、キリスト者の生き方そのものなのです。イエスの言葉の通り、私たちは悔い改めによって神の国に入るのですが、同時に、神の国は、悔い改めに生きる人の中にあるのです。

2)第二に、「灰」はへりくだりのしるしです。創世記 2:7 に「神である主は大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった」とあるように、人はもとは土のちりに過ぎないのです。実際、人が死ねば、そのからだは灰となり、また土となるのです。人のからだの元素も、土に含まれる元素も、変わりません。人の生命や人格が尊く、その生涯に意味や目的があるのは、神によって生かされているからなのです。私たちはそのことを思って神の前にへりくだることを学びたいと思います。

アブラハムは、甥のロトが住むソドムの町のためにとりなしたとき、「ご覧ください。私はちりや灰にすぎませんが、あえて、わが主に申し上げます」（創世記 18:27）と言いました。神は人を「神のかたち」に造り、神と対等であるかのようにして、人に語りかけてくださいます。とくに、アブラハムは「神の友」（ヤコブ 2:23）と呼ばれるほどに、神が親しくしてくださった人物でした。しかしそれは神の特別な恵みによるものであって、神が創造者であり、人は被造物であることには変わりません。それでアブラハム

は「私はちりや灰にすぎませんが…」（創世記 18:27）と言って神の前にへりくだったのです。

ほんとうの「悔い改め」は、この神の前での「へりくだり」から生まれます。聖書が教える「罪」は、法律を犯すことや、社会の通念にそぐわないこと、また、道徳的に問題になることをしてしまうということだけではありません。本来しなければならないことをしなかったこと、それも「罪」に数えられます。罪は人と人との関係を損ね、自分を苦しめるものなのですが、それと同時に、私たちに正しく生きるようにと願い、そうすることができるよう助けてくださっている神の、愛の心を傷つけることでもあるのです。「神が私をこんなにも愛しておられ、教え、戒め、助けてくださっているのに、神に逆らうようなことをしてしまった」という悔いは、誰の心にもあると思います。

私たちは、他の人に与えた損害は、それをお詫びし、償うことができるものは償って、その人と和解しようとします。しかし、それと同時に、神に対しても心からの悔い改めをもって赦しを願うのでなければ、心の安らぎと、罪からの回復はないのです。

きょうの聖書は、イスラエルの王、ダビデが神の前に悔い改め、神に赦しを願った祈りです。ダビデは、部下の妻を自分のものにするため、その部下を戦争でわざと死なせてしまいました。その時代の他の国の王なら、誰でもしているようなことだったでしょうが、神の民の王であるダビデには許されないことでした。ダビデは自分の罪を悔い改めて、こう祈りました。「私はあなたに　ただあなたの前に罪ある者です。／私はあなたの目に　悪であることを行いました。」詩篇 51:4 ダビデは、人の前ではなく神の前に立ちました。人の目ではなく、神の目で自分の罪と向かい合いました。そして、どんな弁解もしないで、王であるという立場に頼らず、神の赦しを必要とする、ひとりの罪人として神の前に立ったのです。

ダビデと前の王サウルはよく比較されます。サウル王は、神をないがしろにし、自分の判断を優先して神の言葉に従いませんでした。神に対して真っ直ぐでない人の心は、やがて歪んでいろんな非常識な行動となって出てきます。特にサウルはダビデを妬んで、何度もダビデを殺そうとしました。サウルは、神を恐れず、神の領域にまで踏み込み、それを幾度も踏みにじりました。しかし、ダビデは神を恐れ、神の前に生きました。それでダビデは、彼の犯した大きな罪にもかかわらず、悔い改めた後、神の祝福を受けました。いつの時代も、神の前にへりくだって悔い改める者に、すぐには表されないかもしれませんが神は、必ず祝福を取り戻してくださるのです。ダビデは詩篇 51:17 でこう言っています。「神へのいけにえは　砕かれた霊。打たれ　砕かれた心。神よ　あなたはそれを蔑まれません。」私たちも、ダビデのようなへりくだった心をもって、神の前に悔い改め、神の大きな祝福にあずかりたいと思います。

3)第三に「灰」はきよめのしるしです。エレミヤ 2:22 に「たとえ、あなたが重曹で身を洗い、たくさんの灰汁を使っても、あなたの咎は、わたしの前に汚れたままだ」とあるように、重曹や灰は、からだや着物、調理器具や家具など、さまざまなものをきれいにするために使われていました。けれども、灰は目に見えるものの表面をきれいにすることはできても、目に見えない人の内面をきよめることはできません。しかし、イエス・キリストが十字架の上で流してくださった血は、人の内面を罪の汚れからきよめる力を持っています。レントの「灰」は、悔い改める者に与えられる、罪の赦し、また罪からのきよめのしるしでもあるのです。

ダビデは、旧約の人物ですから、イエス・キリストの十字架を知りませんでした。しかし、ダビデは、神に特別に愛された人で、神の真実や、恵み、あわれみを他の誰よりもよく知っていました。頭で知っていたというのでなく、経験を通して知っていました。羊飼いの少年だった彼がイスラエルの王にまでなり、サウルに命を狙われて放浪していた彼が、敵対する者がないまでに、その王座を確立するという、波

乱万丈の人生を通して、神の恵み、あわれみを知ったのです。ダビデはその体験からたくさんの詩篇を書きましたが、その多くが、イエス・キリストを預言するものになっています。ダビデは、彼の 28 代後にイエスが彼の子孫として生まれることを知りませんでしたが、神の恵み、あわれみが、罪の赦しと罪からのきよめをもたらすことを信じて疑いませんでした。ダビデは、信仰によって新約の恵みを先取りしたのです。

イザヤ 61:3 に「シオンの嘆き悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、嘆きの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるために」とあります。新約の時代に生きる私たちにとって、レント受難節は決して暗い気持ちで過ごす期間ではありません。今日の説教題を最初は「明るい悔い改め」にしようかと思いましたがそれではちょっと軽い感じがして誤解を与えかねないので止めました。確かにイエス様の十字架という受難を通りますがしかしその先には主イエスと同じように私たちも復活して栄光のからだにされるという希望があるのです。レントは春分の日に向けて、日が一日、一日と長くなる時期に守られます。それは、キリストの赦しときよめの力が罪の闇を打ち負かしていくことを表しています。私たちは、イエス・キリストの復活によっていのちの光の輝きが完全に現れるのを待ち望み、この受難節の時を過ごすのです。そして死の先の復活という希望があるからこそ、残された地上の歩みも精一杯、歩んでゆくのです。

誰でも皆、罪を犯し、失敗し、そして後悔します。何の罪も、失敗も、後悔もない人なんていません。ただ、そのときに、後悔だけで終わらず、きちんと悔い改めるなら、後悔のない人生を送ることができます。しかし、「悔い改め」を通らないなら、その人生は「後悔」しか残らないものになります。「後悔」と「悔い改め」は違います。聖書はこう教えています。「神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」コリント第二 7:10 「後悔」は、「あんなことをしなければよかった」「あのときにこうしておけばよかった」と過去を悔やむことです。また、後悔には、神に対する罪の告白はありません。神様そっちのけで自分を責め続けたり、人の目に恥ずかしいことをしてしまったという思いが起こるだけです。しかし、「悔い改め」は、神の前に自分の罪を認め、神に赦しと回復を願うことです。過去から、将来へ目を向けることなのです。ですから悔い改める者には将来があります。回復の希望があります。十字架の先にある復活の希望を見つめてレント(受難節)の時を過ごしたいと思います。